
ロシアンルーレット

気ままな猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロシアンルーレット

【Nコード】

N76540

【作者名】

気ままな猫

【あらすじ】

ロシアンルーレットの男の話

朝日の差し込む一室のレンガ造りの部屋に青びれた服装の男が椅子に腰かけていた。

男は中央の木造テーブルの横に下向きに顔をうつ伏せ、テーブルに肘をかけ扉の正面にかけてある時計をちらちらと気にしながらぶつぶつと独り言を呟いていた。

「どうしてこうなった。私が悪いのか…負けたらどうなる…」
時計はカチツカチツと時間を刻む。

時間というのは意識すればするほど長く感じるものだ。
「グイグイグイ」古臭いドアがふてぶてしい男たちによって開かれた。

椅子に腰かけた男は少し青ざめた表情でドアを開けた男たちを見上げとつと来たかというような顔をした。まるでこれから処刑される罪人の様な顔つきだ。

「よお元気してるか」男たちの一人が陽気に青ざめた男に話しかけた。

それと同時に周りの男たちはそろそろと男を囲むようにテーブルを囲んだ。

そして座りこんでいる真後ろの男が耳元で

「これから行われるのはいわば秘密の儀式だ。お前が男になれるかなれないのかのな。お前の運を試すんだ。お前が勝てばこの部屋から解放してやる、負ければ…まあお空の天使様とご対面だ。負けても天使様と会えるんだ、そう思えば気が楽だろ。だからぱつとやってささつと終らせようぜっ」

男は内側の右ポケットから使い古されたピストルを取り出し、男の前に雑に放り投げた。ピストルはガガガツとテーブルに傷をたてながら滑りとまる。よく見ればテーブルは傷だらけだ。青びれた服装

の男は油汁ともいえる汗をかき、きつと何回もこのようなことをこ
こで行ったのだろうと思ひ描きピストルを見つめる。

「おおっと、大事なものを忘れていた。これがなきゃ始まらないよ
な」

左側の内ポケットからきらきらと光る金色の弾を男に恐怖をあおる
ように見せつけながら男の目の前においた。そして正面にたった男
がテーブルに座りこみ話しかける。

「さて始めようか。お前も心の準備も整っただろう。ルールは説明
しなくてもわかるだろうがお前の最後になるかも知れないだろうか
ら、丁寧にもう一度ルールを教えてやろう。俺は親切だろう。楽し
め人生を最もすぐ終わるかもしれないけどな。へへっ…ルールは
簡単このピストルで引き金を頭に向かつて放つ。それだけ。弾は一
発だけここが肝心だよよく聞け六発の引金の中の一発だけだ。そして
引金を打つのはお前だけ。自分で引金を引くんだ、おっと自分で死
ぬんだから怨むんじゃないよ。ただし例外もあるからなまず逃げた
ら殺す。

一発撃つことに十分間のお祈りの時間を与える。必死に祈るんだな
ただし祈りすぎて時間を忘れるなよ過ぎたらわかるな。パスは一回
だ大事に使え外せば終り。

…理不尽だろ。なぜこうなった。次は当たるかも知れない。逃げた
い、逃げ出したい。ここで俺は終りたくない。俺ならできる…いろ
いろと思うことがあるだろう。お前のほかにもこれに挑戦したがど
れも失敗。逃げ出した奴はほら後ろの壁を見てみる染みが付いてる
だろうそいつはそこに抑えつけられ拷問の末息絶えた。そいつはそ
の壁にもたれて死にたいと懇願して死んだんだ。俺でも引くほど無
様に死んだぞ。拷問される奴それをただ見ている俺。この世は公平
じゃない不公平なんだ。」

男は言い終わると弾とピストルを見せつけるようにして弾を込めた。

「さあ始めよう SHOW TIME」

青びれた男は始まりの合図で震えている。

ピストルを受け取る時も震えた手でピストルを受け取った。

「一発目はまず当たらない安心しろ。ほら早く早く」

周りにいた男はにやにやとしながら男を急かす。男は息遣いが荒くなる。

「うつ…うつうつチャ…リ…カチャン…ふうつ」

「いいぞその調子だ。よくやった。よかったな。心から祝福するよ。こんなに緊張したことはないだろ。こういうときだからこそいつもより生を身近に実感することができる。生きてて嬉しいだろう。さあ二発目だ時間はたっぷりある」

男の息遣いは先ほどよりも荒くなっていた。そのせいか空気はより重く感じる。そして男は間をおかず続けて引金を弾く

「…カチャン」

「おお素晴らしい。お前はほんと運が強いな。二発目で死んだ奴は何人も見たがたいていの奴がすぐんで時間をかけた奴ばかりだ。生き残る奴はたいていすぐ引金を弾いたもんだ」

青びれた服装の男はすぐさま撃つ態勢を整える。

「ふうふうふう…うつ…うつうつ…」

男は勢いづけるも引金が弾けない。…指が重い…体を包む空気が鉛のように重く全身が金縛りのように硬直した。全神経をピストルに集中するも集中すればするほど硬直する。まるで蛇に睨まれた蛙だ。恐怖で指が動かない。

男の頭の中では超高速で動けと命令が出されるも脳が受け付けない。男は考える（これは当たり前なんじゃないかだったらパスだ。でも外れたら……）

時計の針は刻々と時間を刻む。

9分：8分：7：6・・5・・4分

「おいおい。3分切ったぞもうそろそろ決めたらどうだ。」

男がすぐ撃たないことに苛立ちを感じ始め男が話しかけた。

「あと3分無いぞ俺がこうして話しているうちにも時間は進むんだ。」

なんなら俺がお前の代わりに撃とう」男はピストルを受け取ろうと男に手を伸ばす。

「まうまう待つてくれ撃つ、自分で撃つからっ」初めて男は口を出した。

「これはあつあつあたりだっ…弾が入っている」

「いいんだな。パスは一回だけだ。外せば終りなんだぞ。」

「分かつてる」

「さあ撃つんだ。地獄行きの切符を手取るか天国への切符を手にするか。まさに分かれ道だな。おおっと天国も地獄もあの世だったな」

周囲の男たちは少し笑みをこぼす。

「あはははは、その通りだ。はっはっはっ」

周囲の男たちとは別に苦笑した男は決意を固めて壁に向かって放つ。

「チャリ…バアアン」

レンガ造りの部屋に銃声が鳴り響く。男は笑みを浮かべ周囲の男たちを見渡す…しかし男は何らかの周囲の異変に気付いた。明らかにこちらを楽しそうに見ている者が多いのだ。そして正面の男が

「本当に運のいい奴だ。お前で2人目だよ。解放されたのは。さあ部屋を出ていくといい君は自由を手にしたんだ。」男は扉に向けて手を出し導いた。

男は立ち上がると気力を使い果たしたのかよろよろと歩きだした。扉を開け朝日を浴び気持ちよさそうに部屋を出た。

その直後だ。音が聞こえる。「キキイ…バアアン」車にぶつかる音が聞こえる。

「ううつ、なぜ…なんだ…」うつ伏せになり血が周囲を染める。うつ伏せの男に向かいコツコツツと向かう足音が近づいていた。

「解放…されたんじゃないのか」

「約束は破つてないぞ。ちゃんと云ったじゃないかこの部屋からは解放するよこの部屋からな」

笑みを浮かべ男は去って行った。

（後書き）

お読みいただきありがとうございます。練習のつもりで書いたもので何分不十分なてんが あると思いますがよろしく願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7654o/>

ロシアンルーレット

2010年11月7日16時10分発行